

きょうかん賞

「見守り，見守られ・・・」

蔭山 満子さん（京都市左京区）

「あ，ラッキーや。」

「ラッキー，おはよう。」

今日も，小学生が口々に挨拶をしてくれる。

「はーい，オハヨウ。いってらっしゃーい。」

私は腹話術師のように，愛犬ラッキーに成り代わって，挨拶を返す。

小学生の登校時間に合わせて犬の散歩をする，私流の「見守り活動」を始め、もうすぐ丸3年になる。既に子育てを終え、夫と2人暮らしの私にとって、何にも増してすがすがしい朝のひとつときだ。子ども達が元気で、成長していく姿を毎日見ていると、本当に嬉しく、社会の宝だと感じる。長く続けていると、子ども達の顔と名前，誰と誰が兄弟で，仲良しグループか，最近見ないT君はインフルエンザらしい…など，だいたいの情報は把握できる。元気のない子どもには，特に注意して声をかけるようにしている。

「寒いなあ～。」

「今日の服，かわいいなあ～。」

…少しでも笑顔が返ってくると，ホッとする。

こう書くと，何か立派なことをしているかのようであるが，実は「見守り活動」で，一番救われたのは私自身かもしれない。この秋，それまで経験したことのない腰痛に見舞われ，2週間ほど外出ができないことがあった。もちろん，ラッキーも小屋に繋がれたままで，欲求不満。このとき，いつも下校時に，給食で残したパンなどを門の隙間からラッキーに食べさせてくれているMちゃん達が，インターホンを鳴らしてくれた。窮状を話すと，

「わかった！ほな，うちらがラッキーの散歩に行けばいいんやん！」

なんと，ラッキーの散歩役を買って出てくれたのである。

その日から毎日，彼女達は，便を捨てるためのビニール袋まで持参して，土日も欠かさず散歩に行ってくれた。腰痛で弱気になる中，どれだけ有難かったことか…。本当に感謝している。

そのMちゃん達も，来年は4年生になる。「見守ること」は「見守られること」でもあると教えてくれた彼女達が卒業するまでは，少なくとも，この毎朝の活動を続けたいと思っている。